

林 大 の 風

第15号

高知県立林業大学校

基礎課程・チェーンソー実習開始

新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴い、通常授業の開始が5月14日となったことから、例年より遅れて、5月末にチェーンソーの特別教育を終え、基礎課程の研修生19名のチェーンソー実習が始まりました。

防護ズボンに防護ブーツ、色鮮やかなヘルメットやウェアで身を固めた研修生たち。林業の中でも、伐倒作業は事故の6割を占める危険を伴う作業です。このため、安全、確実な伐倒を行えるよう、チェーンソー技術を基本から身に付けてもらいます。

事業体におけるチェーンソー伐倒の技術の伝え方は様々ですが、OJTによって現場で先輩や班長の動きを真似ながら覚えていくことが多いと思います。しかし、大きな重量物である立木の伐倒を現物でいきなり練習するのは非常にハードルが高く、危険も伴います。そこで本校では、まず平地で長さ1mほどの丸太を固定して練習します。

平地における実習の到達目標は、①安全装備を正確に装着すること、②精度の高いチェーンソーの操作を習得することの2点です。

①の安全装備は上述のズボンとブーツに加え、イヤーマフ、バイザー、防振手袋、チェンブレイキです。イヤーマフやバイザーは装着を忘れてしまうことがあるので、研修生同士で指摘しあうことで装着漏れをなくすようにしています。また、チェンブレイキは木を切るとき以外は必ずかけるようにし、意図せずソーチェーンが回ることを防ぐよう指導しています。



▶切込みの角度を測る研修生

②のチェーンソー操作は、水平や斜め切りといった切込みの角度や深さを正確にするため、目標数値を定めて精度を向上させてゆくものです。立木の伐採は、

受口と追い口による伐倒が基本です。これらの精度を向上させることで狙った方向に確実に倒すことができ、かかり木の発生を未然に防ぎ、より安全な作業につなげることが可能となります。

水平や斜めに切れているか、切るたびにタブレットの角度計でチェック。切り込む際は指定された深さに切れているか、mm単位で計測します。これらの反復練習の結果を書き出し、繰り返しの精度の向上を実感してもらいます。また、切っているフォームが崩れていないか、動画でチェックも行います。そして、正確なチェーンソーワークが行えるようになった状態から、受口（伐倒方向）の練習をします。受口を作った際は15m先の目標から何m離れているかを計測。その後は修正によって出来る限り目標へ近づけるよう受口を削っていきます。



▶動画を撮影し姿勢をチェック！

これらは実際に立木を切る前段階で、いわば野球の素振り練習のようなものです。基本の装備やフォームを体に染み込ませることによって、安定して一連の動作を行えるようにします。

平地の後は、約30度の模擬傾斜地でも同様の練習を行い、正確にチェーンソーが扱えるようになった後に演習林にて伐倒をスタートします。1年間という限られた時間の中ですが、研修生たちにできる限り吸収してもらえよう、教員たちも効果的な指導を行ってまいります。

現在、一般社団法人全国林業改良普及協会より、「安全で正確な伐木のためにチェーンソーの操作技能基本トレーニングテキスト」の受講者用と指導者用のテキストがPDFで公開されています。本校での技能実習と重なる部分も多いので、興味のある方はご一読ください。

URL：http://www.ringyou.or.jp/publish/list_06.html